

音をたてぬようにそつと窓を開け、サンダルをつっかけベランダへ出た。

星のない真っ黒な空。今夜は降らないという予報だったが、風が妙に湿っぽかった。これから一雨くるのかもしれない。

煙草を取り出し、口にくわえて火をつけた。香澄は部屋で煙草を吸うことをいやがる。留守中ならバレやしないのだが、そこは私の律儀なところであった。

腕時計の蛍光に目をこらすと、針は十一時をさしていた。私は絶望的な気持ちになった。まだ十一時！なのに、何もすることがない。宵っ張りの私には、これは地獄だ。

なにしろ、部屋の明かりをつけることが許されない。テレビをつけることもだめ。物音をたてもいけない。現在この部屋に人がいるということを、外から悟られてはいけないという状況に、私は閉じ込められている。

私はこの部屋の主ではなかった。三流劇団の無名役者の身分では、七階建てオートロックスのマンションには住めない。この部屋は、栗田香澄の部屋である。

香澄は私より五つ年下で、トップ女優とまではいえないが、アイドル歌手からの転向組としてはまずまず成功した口だろう。演技の評価も、好感度も高く、幅広い世代からの支持を受けている。

その人気女優と私は、どういうわけか交際していた。

口説かれたのは、私のほうだった。二ヶ月前、ドラマの打ち上げのパーティでのことだ。はじめは何かの間違いだと思っただし、いまだに信じられない気持ちもあるが、その日以来、たしかに私たちはつきあっている。

私の所属する劇団は、三木繁子という舞台女優が主催だった。繁子はキャリア三十年の大ベテランで、私はその繁子の愛人をつとめている。そのおかげで役をもらい、映画やドラマなどにも売り込んでもらっていた。といっても、いずれもエキストラに毛の生えたような端役ばかりであったが。

そういった事情も、香澄にはすべて話してある。気にしない、と彼女は言った。いったいこんな私のどこが気に入ってくれたのかは、謎だ。意気地がなくておどおどしているところが、母性本能をくすぐるといったところか。香澄は奔放で、我がままで、姉御肌を気取るのが好きな女だった。

繁子は嫉妬深い女だから、私の裏切りを知れば、ただではすまないだろう。今の私は、繁子に放り出されれば役者としてそれで終わりだ。

一方の香澄も、ファンの中心は男性であり、数多くのCM契約もある。自由な恋愛は、社会的に許されない立場であった。

したがってこの交際は、お互いの関係者にも一切秘密だった。私たちは二人きりで旅行にいったことも、食事にでかけたこともない。会うのはこの香澄の部屋だけ。DVDを見たり、芝居の話をしたり、付き合いはじめなら、それだけでもじゅうぶん楽しい。

ただ、部屋の出入りには細心の注意を要した。

幸いなことに、このマンションには常駐の管理人がいない。他の住人も単身者が多いらしく、時間を選べば、誰かと顔をあわせることもなかった。そのうえで私は帽子とマスクで顔を覆い、防犯カメラのついたエレベーターではなく非常階段を使うなど、用心に用心

を重ねて通っていた。

ところが一週間前、とうとうドジを踏んだ。香澄の部屋に入る瞬間を、隣人に目撃されてしまったのだ。

隣の住人は、水商売風の派手な女だった。うかつにも私は、深夜ということでも油断をし、変装をしていなかった。私の顔を見て芸能人だと認識できたかどうかは疑問だが、この際それは関係ない。私がどこの誰であれ、栗田香澄の家に深夜男が訪ねてきた、それだけでじゅうぶんスキャンダルの要件は満たしている。

驚いたことに、女はその夜のうちに、このネタをマスコミに売った。知り合いに関係者でもいたのだろう。

翌日、朝食を買いに行った香澄が血相を変えてもどってきて、ベランダに出るなど私に叫んだ。マンションの入り口に黒いワゴンが停まっており、隣室の女が運転席の男と話をしていたそうだ。二人は香澄の部屋の窓を見上げていたという。男はゴシップ誌のカメラマンに違いない、というのが香澄のカンであった。

香澄が仕事にでかけたあとも、ワゴン車はマンションの前を動かない。やむなく、私はこの部屋に閉じこもっている。芸能記者なら、私の顔は知っているはずだ。もし香澄の力があたっていたら、このこ出ていったとたんにカメラの餌食になる。帽子やマスクでごまかせるとは思えなかった。顔を隠せばかえって怪しまれるだろうし、追跡をふりきって逃げ切れるという保証がない以上、冒険はできない。

海外ロケの仕事が入っていた香澄は、やむをえず私を部屋に残し、四日前に出かけていった。それでもワゴン車は退かない。

その後、たびたび玄関のチャイムが鳴った。こっそり魚眼レンズをのぞくと、化粧の濃い隣室の女の顔が見えた。かまをかけているのだ。誰がその手にのるものか。

以来、私は居留を決め込んでいる。この四日間、隣室の女にも悟られぬよう、物音もたてず、シャワーも使わないようにしていた。食事はレトルトかインスタント。ぐっすり寝込んでいびきをかいてはいけないので、寝酒もひかえている。

繁子にはしばらく故郷に帰ると電話しておいた。これで、来月はじまる舞台稽古までは大丈夫だ。情けない話だが、仕事の少なさが幸いした。

辛抱強さは、私の数少ない取り柄のひとつである。昔から根比べで人に負けたことはなかった。このままじっと息をひそめていれば、いずれはワゴン車のカメラマンも「さてはガセネタだったか」とあきらめてくれるだろう。そう祈るしかない。

人目を忍ぶ恋は、香澄には刺激的な面もあったろう。しかし、交際が発覚してスキャンダルとなれば、話は変わってくる。周囲は猛反対するだろうし、その反対を押し切つてまで彼女が私を求めてくれるとは、自分でも信じられなかった。

私のような男が、たとえ二ヶ月とはいえ栗田香澄とつきあえたこと自体が奇跡のようなものだ。それはわかつている。しかし私は、この奇跡を手放したくない。

ここはとにかく、息を殺して危機が去るのを待つしかなかった。

日中をほとんど仮死状態で過ごす私にとって、この一服のひとときは、軟禁生活ゆいいつの憩いであった。夜ふけを待ってベランダに這い出し、ほんのつかの間、外の空気を吸う。それほど広いベランダではなかったが、ここは最上階だし、手すりには磨りガラスがはまっている。あまり前に出なければ、路上のワゴン車から見つかる心配はなかった。

その男に気がついたのは、一本目の煙草を吸いはじめてすぐだった。

香澄の部屋は七階建てで、通りをはさんだ向かいにも同じ高さのマンションが建っている。その最上階のベランダに男がひとり、両手を高くあげ、大きく振っていた。

そのアピールが私に向けられたものらしいと気がついて、私はぎよっと息を飲んだ。

香澄のマンションは、繁華街の光を背にむけて建っている。こちらから向かいのベランダはぼんやりと見えるが、向こうからこちらは、逆光になって見にくいはずだ。おそらく、煙草の火で気づかれたのだろう。

私は咄嗟にしゃがみ、手すりに身を隠した。そのまま後ずさりして部屋の中に入り、カーテンの陰から顔をのぞかせて、外を見た。

男はまだ、こちらにむかって手を振っている。私がいなくなったことはわかっているはずなのに、諦めきれないのか、必死で手を振り続けていた。

いったい、なにをしているのだろう。ひどく取り乱しているように見える。まるで遭難者が救助のへりを呼んでいるかのようなようだ。

まさかこの男までマスコミの人間ということはなからうと思ひ、私はもういちどベランダに出ていった。

私の姿を見ると、男はバンザイをして喜びを表し、拝むように手をあわせて感謝を表した。年格好は、たぶん私と同じくらい。肌着の上に革ジャンをはおっている。

男はベランダの端にいた。右手に見える窓は閉まっていたが、明かりがついている。カーテンが半分あいていて、格子の手すり越しに中の様子が見えた。ソファにすわる体格のいい中年男。そわそわと歩き回るネグリジエを着た若い女。テレビはついていなかった。二人は何か口論をしているようだ。

ベランダの男は、私に向かって携帯電話をかざしてみせた。それから指先で、空中におおきく数字を書きはじめた。0、9、0、8、0……。どうやら自分の番号らしい。この番号に電話をかけると言っているのだろうか。

困惑する私に、男は何度も番号のサインを繰り返した。大きな声を出せば会話のできる距離であったが、そうはしたくないらしい。もちろん私も、そんな真似はできない。

とにかく、あの派手なジェスチャーを止めさせないと、ここに私がいることをワゴン車に気づかれてしまう。仕方がない。私は部屋にもどって自分の携帯を取り出し、男の示した番号にかけてみた、

男はすぐに電話に出た。

「これから言うアドレスにメールをください」

「どうして。用があるなら、いま言ってくれ」

「声をたてたくないんだ」

男は送話口を手でおおい、小声で言った。どうやら室内の男女に聞かれることを恐れているようだ。

早口で二回アドレスを繰り返して、電話は切れた。単純でわかりやすいアドレスだった。私は言われた通りメールを送ってみた。

『いったいどうしたんですか』

男はメールを受信すると、うつむきながらポチポチと文字を打ち込み、それから携帯を高く掲げて見せた。いま返信したぞ、という合図らしかった。

メールはすぐに届いた。

『君の隣の部屋で、女が殺されている』

私は顔を上げ、男を見た。

「そうなのだ」と言いたげに、男はこっくり頷いた。

香澄の部屋は角部屋だから、隣の部屋はひとつしかない。私をマスコミに売った、例の女の部屋である。

あの女が殺されているのというか。まさか。

『悪い冗談はやめろ』

私は返信した。その返信は、すぐに届いた。

『冗談ではない。のぞいてみる』

そんなことは出来ない。手すりから身を乗り出せば、下のワゴン車から丸見えだ。私は男にむかって首を振った。

男は外国人のように、両手を大げさに広げてみせた。どうしてだ！ と全身で叫んでいるようだった。

メールも届いた。

『なぜ？』

私は返信した。

『おれには関係ない』

『殺人だと言ってるのに』

『おれには関係ない』

男は呆然としているようだった。人が殺されたと聞けば、誰でも大騒ぎをすと思いい込んでいたようだ。まあ、それが当然だろう。私の置かれている状況が、特殊すぎるのだ。

私は続きのメールを打った。アドレスを一から入力するのは手間なので、最後の着信に返信するかたちで送った。

『おれなんかより、警察に通報したらどうだ』

『それができない』

『なぜ』

男は親指で背後の窓を指し、襟をくつろげて自分が下着姿であることをアピールした。それから左手を高く掲げた。その手には、一足の靴が握られていた。

なるほど。そういうことか。

彼は間男なのだ。情事の最中に女の亭主が帰ってきてしまい、あわてて靴を持ってベランダに避難したのだろう。三文芝居のようなシチュエーションだが、たしかにこの状態で死体を発見しても、警察に通報などできない。対処に窮しているところに私の煙草の火を見つけた。だからあれだけ必死に、私の注意を引こうとしたわけだ。自分のかわりに通報させるために。

……すると、隣の女は本当に死んでいるのだろうか。しかも、男は殺人だと言っている。一目で殺しわかるほど、凄惨な死体だということか？

こちらのマンションのベランダは部屋ごとに独立しておらず、隣りとはスチールの板で

仕切られていた。仕切りには、下に十五センチほどの隙間があいていた。そこから光がもれているところを見ると、部屋には明かりがいついているらしい。しかし、この隙間からのぞいたところで、角度的に部屋の中は見えない。

私はいったん中に入り、手鏡をもって再びベランダに出た。それから床の上に腹ばいになって、仕切りの隙間に鏡を差し込んだ。これなら、少しは室内の様子が見えるはずだ。幸いカーテンは全開で、視界をさえぎる家具などもなかった。

掃除の行き届いた、きれいな部屋に見える。間取りは2区のはずだが、仕切りのアコーデイオン・カーテンがたたんであるらしく、広々としていた。大型テレビに、クリーム色の高そうなソファ。大きな姿見と、観葉植物。いかにも金回りの良い女の一人暮らしといった部屋だった。

鏡の角度をいろいろ調整していると、ようやく女の姿が見えた。

はじめは壁際に直立しているのかと思ったが、やがて天井からぶら下がっているのだとわかった。このマンションの最上階にはロフトがついている。そのロフトの手すりにかけてたロープで、女は首を吊っているのである。

私はその場に座り直した。腰が抜けたといった方が正確かもしれない。いい年をして、葬式以外で人間の死体を見たのは、これがはじめてだった。

早鐘のように心臓が鳴る。とにかく落ち着くことだ。私は大きく息を吐き、目をとじた。何度も唾をのみこんだ。しかし効果はなかった。

私は立ち上がり、向かいの間男を見た。

間男はじつとこちらを見ている。

メールが届いた。

『死体が見えたか』

『見えた。でも、首を吊っていた。自殺じゃないか』

『自殺にみせかけているだけだ。おれは見えていた』

『見ていた？ 殺人の瞬間を？』

『黒づくめの男が、むりやり女を吊るした。一部始終を、おれは見えていたんだ』

『いつのことだ』

『ほんの十五分前』

『全身がぞわぞわと総毛立った。』

そういえばつい先ほど、壁越しにドスンという物音が聞こえたような気がする。気にもとめなかったが、あの瞬間、隣りの部屋で殺人が行われていたというのか。

『あんだ、人が殺されるのを、黙って見ていたのか』

『仕方がない。ここからじゃ何もできない』

『助けを呼べばよかったじゃないか』

『この状況で、そんなことできない。それよりも、早く警察を呼んでくれ』

『断る』

私は迷わず拒絶した。

間男はしばらく携帯の画面に見入っていた。信じられないという表情が、目に浮かぶようだった。

私はすぐに次のメールを送った。

『すまないが、こっちも事情があるんだ。関わり合いになりたくない』

『どうして。通報するだけじゃないか。あんた、警察に追われてるのか』

『そんなんじゃない。とにかくだめだ。通報したけりゃ自分でしろ。目撃者はあんだろ』

『それができないから頼んでいる』

『できるさ。匿名ですればいい』

『名前を隠したところで、事件を見たと言ったとたん、向かいのマンションの七階だとバレル。この高さじゃなきゃ、部屋の中は見えないんだから』

『それじゃあ、おれが通報しても信憑性はないな。隣にいたんじゃ、事件を目撃できないから』

『そのかわり、怪しい物音を聞いたと言えばいい』

『そんなもの聞いていないよ』私は嘘をついた。『あんただって、目撃したなんて言わなきゃいいじゃないか。女が殺されたとだけ言って、電話を切れよ』

『警察はかならず通報者を探す。そうだったら、君の部屋にも警官が行くぞ』

『だったら、やっぱり通報するな。おれもしないから』

『いや、する。おれにされたくなかったら、君が通報しろ』

『無茶苦茶なことを言うな』

そう返信すると、私は携帯をポケットにねじ込んで部屋にひっこんだ。

知ったことか。私のことをマスコミに売った女だ。他にも卑劣なことをして、人の恨みを買っていたのに違いない。殺されたって、同情に値しない。

私はベッドに体を投げ出し、目を閉じた。しかし、すぐにガバッと起きあがった。ブランドーの瓶をつかみ、ラッパ飲みをした。激しく嘔せ返ったが、もう気にしない。シャワーもテレビも、もう遠慮はいらないのだ。いくら物音をたてても、もうかまわない。

隣の女は死んでいるのだから。

……

私は後悔した。のぞき見など、するのではなかった。この壁の向こうに、女の死体がぶら下がっていることを知ってしまった。このまま気持ちたちが休まるはずはない。

携帯が鳴った。メールの着信であった。

『ここは、おれのボスの愛人の部屋だ。おれはボスの女と関係をもっている。いまボスに見つかったら、おれは殺される』

私は再度ベランダに出、間男へ返信を送った。

『あんた、ヤクザか』

『おれは違うが、ボスは似たようなものだ。建設と不動産の会社を経営し、おれはその運転手をしている』

『本当に殺されるのか？』

『命まではとられないと思うが、女に手を出したんだから、半殺しぐらいの目には遭うだろう。社長も恐いが、取り巻きの連中もつと恐い』

『自業自得じゃないか』

『女の方から誘ってきたんだ。しかし、たしかにまずかった』

間男は急に神妙になった。私の同情を買おうとしているのだろう。

『あんた、本当に殺されるところを見ていたのか』

『ああ』

間男いわく、はじめにチカチカと、部屋の明かりがつかいたり消えたりした。それから、レインコートにサングラスにマスクの大男が入ってきた。はじめは女と話していたが、隙を見て抱きつき、薬を嗅がせた。朦朧とした女の首にロープみたいなものをかけて、それをロフトの手すりにまわして吊り上げた。女はジタバタ暴れていたが、そのうち動かなくなつた。そして、男は部屋を出て行った……。

『こっち側のマンションで、おれ以外の目撃者はいるのか？』

『いないだろう。明かりのついていない部屋は他にない』

『それじゃあやはり、おれたちが通報しなければ』

おれたち？　たち、とは何だ。

『勝手に仲間あつかいしないでくれ』

『こっちの事情はわかつたらう。通報してくれよ』

『だめだ』

『どうして』

『こっちもあなたと似たような状況なんだ』

『そっちの部屋には、他に誰もいないじゃないか』

『いなくても、そうなんだ』

『ふざけるな。人が死んでいるのに』

『ふざけてない。下の道路を見ろ。黒いワゴンが停まっているだろう。あれはおれを狙っているんだ』

私は事情を説明した。さすがに香澄の名前は伏せたが、自分が売れない役者であることも含め、洗いざらい話した。なにもそこまで白状する必要はなかったのだが、自分のエゴで通報を拒む後ろめたさが、私を饒舌にさせた。

『そういうわけで、おれもここにいることを人に知られたくない。だから通報できない』

『どうしても、だめなのか』

『だめ』

『警察があんたのことをマスコミにバラすとは思えないが』

『冒険はできない。する義理もない』

間男はがっくりと頭を落とした。ここまでため息が聞こえてきそうな、激しい落胆ぶりであった。

私はメールを送った。

『放っておけよ。そのうち誰かが見つけてくれる。おれもあなたも、関わり合いになることはない』

『そんなことを言うな。こっちは現場を見ちまったんだ。本当に、たったいま殺されたばかりなんだ。犯人はまだその辺にいるかもしれない』

『いないよ。ぐずぐずしているわけがない。さっさと逃げるに決まっている』

『殺しだと教えてやらないと、警察は自殺だと思いかもしれない』

『それがおれたちの責任か？』

そう送信したところで、私はふと、あることを思い出した。

先ほど隣の部屋をのぞいた時、観葉植物の鉢の下に、何かが落ちているのを見た気がする

る。黒革の、定期入れか、財布のような物だった。

きれいに片付いていた部屋の中で、あの物体は違和感があった。ひよっとしたら、あれは犯人の落とし物ではないのか。

『犯人が、財布のような物を落としたかもしれない。そこから見えるか？』

私のメールを読むと、間男は手すりから身を乗り出し、目を凝らした。

『あった。ガラステーブルの上のあれか』

私は首を振った。そうではない。私のがぞいた角度からはテーブルの上は見えなかった。テーブルではなく、植木鉢の下だ。

そのように返信を打っている途中で、追いかけるように訂正のメールが届いた。

『植木鉢の下に落ちているあれか』

私は入力しかけた文字を削除し、次のように打ち直して送った。

『これで大丈夫だ。警察が来るのが遅れたって、犯人の遺留品がある。首つり自殺が偽装だと言うこともわかる。犯人を捕まえる手がかりにもなる』

『待ってくれ。あれが犯人の落とし物だとどうしてわかる』

『確証はないが、可能性はあるだろう』

『だから放っておけないのか』

『なにも巻き込まれることはない。あんたもおれも』

『君は良心が痛まないのか』

『だから、そんなに通報したけりや自分ですればいいじゃないか』

また同じ話の繰り返し返り返りになっている。正直なところ、なぜ彼がそこまで通報したがるのか、私は理解できなかった。

すこし間をあけて、メールが届いた。

『卑怯じゃないか』

私は自分の目を疑った。どの口でこんな台詞を吐くのか。私は怒りをこめて文字を打ち込んだ。

『自分で何を言っているのか、わかっているのか』

『君だけのことじゃない。自分のことも含めて言っている』

『あんたといっしょにするな。あんたとおれとは違う』

『どこが違う？』

『あんたは自分の身だけをかばっている。おれは違う。おれたちの交際がバレることは、いろんな方面に影響が大きすぎるんだよ』

『ずいぶん大物みたいな口をきくんだな』

『芸能界はそういうところなんだ。おれはどうなってもいいが、彼女は売れっ子だ。迷惑はかけられない』

『こういう事情なら、世間だってわかってくれるだろう』

『そんなに甘い世界じゃない。あんたにはわからないだろうが』

『いいや、よくわかったよ』

『なにがだ』

『やっぱり君は卑怯者だ。すくなくともおれは、人のせいにはしない』

短い文章に、はっきりと軽蔑が込められていた。私はますます頭にきたが、返信の内容

は、どういいうわけか言い訳がましくなっていました。

『わかってくれ。CMや映画の降板は、違約金が発生することもある。おれは彼女を守りたいんだ』

『もういいよ。やらない理由を見つければ上手だな』

捨て台詞のような言葉を送ってよこすと、間男は携帯を上着のポケットにしまった。私とはもう交信する価値がない、と諦めたような態度だった。

サラサラと雨が降り出した。顔にまとわりついてくるような、不快な霧雨であった。

風向きが悪く、雨はこちらのベランダに吹き込んでくる。さっきと部屋に戻ればよいものを、私はいつまでもベランダでぐずぐずしていた。

人として、男として、なんだかもの凄く見下げられたような気がする。このまま背をむけることは、相手の言い分を認めるようで面白くなかった。かといって、うまく切り返す言葉も思いつかない。

そのうちに、向こうの部屋に動きがあった。それまでソファにすわっていたボスが立ち上がり、窓に近づいてきたのだ。

間男はがっくり落ち込んでいて、背後への注意がおろそかになっている。私はあわててメールを送った。

『気をつける。ボスがベランダに出てきそうだぞ』

間男ははじかれたように背筋をのびし、びったりと壁にはりついた。

ボスはのしのしと、窓にむかって歩いてくる。逆光を背に受けた大きな体がどんどん近づいてきて、やがてカーテンの隙間を覆い尽くすほどになった。

絶体絶命だ。ボスの手が、窓の棧にかかる。

万事休す。

と、思われたが、なぜかボスはそこで動きを止めた。

体を窓に向けたまま、顔は室内を振り返っている。奥にむかって何か話をしているようだ。それも、かなり激しい口調で。女との口論が、まだ続いているのだろうか。

影はなかなか動かない。しびれを切らした間男は、窮屈な体勢のままメールを送ってよこした。

『いったいどうなってる？』

『わからない。今にもベランダに出てきそうだが、そこで止まっている。怒っているみたいだ』

『それは聞こえる。ボスが一方的に怒鳴っている。女は無事か』

『ボスが邪魔で見えないが、手をあげている様子はない。女がわざと喧嘩をふっかけて、ベランダへ出さないように引き留めているのかもしれない。ボスは何を怒っているんだ』

『彼女が浮気をしているんじゃないかと、詰め寄っている』

なるほど、凶星をさされているわけか。これでは間男も、生きた心地はしないだろう。

しかし見たところ、ボスは別段、ベランダに浮気相手が隠れていると疑っているわけではなさそうだ。女と口喧嘩をしながら、腹立ち紛れにベランダに出ようとしたものの、口論の切れ目が見つからず足が止まった。そんなふうに見えた。

私は考えた。

ボスがベランダに出てきたとする。彼の目にまず飛び込んでくるのは、隅で震えている間男ではなく、向かいの建物、すなわちこちらのマンションであるはずだ。視線はごく自然に、明かりのついている窓に向けられるだろう。

つまり、ボスが女の死体を発見してしまう可能性が、じゅうぶんにある。

ボスは警察に通報するだろうか。もし通報すれば、警察がやってくる。ボスも通報者として、事情聴取を受けることになるだろう。その騒ぎに乗じて、間男はベランダを脱出できるか？ いや、かえって逃げるタイミングを逸してしまうに違いない。むしろ彼にとつては、今よりまずい事態になる。

私はいつしか、間男の身を案じているのだった。

とにかく、ボスの注意を部屋の中にもどすことだ。私は間男にメールを送った。

『そっちの部屋の電話番号がわかるか』

間男は番号を送ってよこした。

『どうするんだ』

『こっちから、かけてみる』

『何を話すつもりだ』

『いいから番号をよこせ』

何話すかなど、自分でもわからなかった。ただ、こんな時間に電話がかかってくれば、ボスは疑惑の矛先をそちらに向けざるであらう。電話の主を、女の浮気相手だと思いに違いない。あとは、間違い電話のふりでも何でもいい。

私は番号をダイヤルした。

呼び出し音が鳴る。

ボスの頭が右へ動いた。その視線の先に、電話機があるのだろう。

しかし、ボスは動かない。

女も電話に出なかった。呼び出し音だけがむなしく繰り返している。

私はしつこく呼び出しを続ける。ようやく、ボスが窓に背を向けた。もう一息だ。しかしそこからがまた、動かない。

間男からメールが届いた。私は電話を切ってメールを開いた。

『部屋の電気が消えたぞ』

はじめは何を言っているのかわからなかった。私がぼんやりしていると、すぐに次のメールが届いた。

『君のとりの部屋だ。死体のある部屋の電気が消えた』

私はベランダの仕切りを見た。たしかに、先ほどは下の隙間から漏れていた光が見えなくなっている。

『停電か？』

『いや。他の部屋の明かりはついている。それに電気が消える一瞬、部屋の中に黒い人影が見えた』

嘘だろう。私は喉をならして唾を飲んだ。

知り合いが訪ねてきたのだろうか。そんなはずはない。その人物は首吊り死体を目の当たりにしながら、わざわざ部屋の電気を消したのだから。

間違いない。犯人だ。犯人が戻ってきたのだ。落とし物をしたことに気づき、拾いに来たのに違いない。

首筋と背中につめたい汗が噴き出した。私は息を止め、大急ぎで部屋の中に逃げ込んだ。玄関にむかって施錠をたしかめ、チェーンロックを引きなおし、それでも足りずに、ドアのノブを力いっぱい手前に引いた。犯人がこの部屋にやってくるわけは絶対にないのだが、そうせずにはいられなかった。

隣の部屋に殺人者がいる。壁一枚へだてた、ほんの数メートル向こうに。

胃のあたりを握りつぶされるような緊張を覚えた。膝が震え、かちかちと歯が鳴った。自分でも情けないと思う。こんな時、勇敢な男ならどうするのだろうか。乗り込んでいて、格闘のうえ組み伏せるか？ 自分にそのような大それたことが出来るとは、夢にも思わなかった。ここは息をひそめ、恐怖をやり過ごすより仕方がないだろう。

これは卑怯な振る舞いか。人殺しに勇敢に立ち向かえない男は、卑怯なのか。人間は卑怯か勇敢か、どちらかしか選べないのか。私は中間でよいのに。

この切迫した状況でどうしてこんなことを考えているのかといえば、先ほどのメールが引っかかっているためである。卑怯者と言われたことが、我ながらよほど悔しかったらしい。

メールが届いた。

『明かりがついた。誰もいない』

私はドアに張り付き、魚眼レンズに目をあてた。耳をそばだてると、隣の部屋のドアの聞く音が聞こえた。やがて視界の隅に、黒い人影が現れた。

あれが犯人……。間男の言ったとおり、黒いレインコートのフードを頭からすっぽりかぶり、サングラスとマスクをしている。想像したより小柄であった。それでも、ドアのむこうに飛び出して格闘する気にはならなかったが。

犯人は、私の目の前を素通りして行った。エレベーターとは反対の方向だった。そこには非常階段の扉がある。

カチャリという音が、二度聞こえた。スチール製の扉が開いて、また閉じる音だった。間をあけて、私は外に出た。裸足のまま廊下を歩き、蛮勇をふるって非常階段の扉を開くと、はるか下の方からカンカンという足音が響いていた。

私は手すりから身を乗り出し、折り返し階段の吹き抜けを見下ろした。二階のあたりで、もぞもぞと動く人影がすしだけ見えた。犯人は階段を降りながら、レインコートを脱いでいるらしい。

メールが来た。

『テーブルの上の物がなくなっている』

一階のスチール扉の開閉する音が聞こえた。私は部屋にとって返した。

犯人はコートを脱いでいる。顔は無理でも、姿かたちや髪型くらいは七階からでもわかるはずだ。私は間男にメールを送った。

『犯人が逃げた。いまマンションを出て行く。どんな奴か、そこから見てくれ』  
『だめだ。こっちは身動きがとれない』

私はベランダに出た。ボスはまだ窓辺にいた。その横で、間男はトカゲのようにぴたりと、壁に背中をくっつけている。

私はもう一度手鏡を持ち出して、仕切りの隙間から隣室をのぞいてみた。なるほど、植木鉢の下の財布だか定期入れだかは、そのまま残されている。すると犯人の落とし物は、テーブルの上の方だったのか。

ボスが窓から離れた。いよいよ感情のおさまりがつかなくなったのか、大股で部屋の奥にむかって歩いて行く。次の瞬間、キヤーという悲鳴が私のところまで聞こえ、女の体が窓辺まで転がってきた。殴られたのか、投げ飛ばされたのか。

ボスはソファにどっかとお腹をおろし、テーブルの上のこっていた酒を一気におおった。興奮で顔を真っ赤にふくらませ、肩で呼吸をしている。

『ボスがすわった。ひとまず大丈夫だ』

『女は？』

『床に伏せたまま、泣いている。ひどく鼻血を流している』

間男はようやく壁から離れ、手すりに近寄って道路を見下ろした。

『間に合わなかった。人の姿は見えない』

犯人に逃げられた。いや、私がみすみす逃がしたということになるのか。

『ワゴン車は？』

『見える。中にはカメラマンがいるんだろう？ 出て行った犯人を撮っているかも』

『そんなわけない。連中が狙っているのはおれだ。関係ないやつ写真は撮らないよ』

惜しかった。犯人が黒づくめのままだったら、あるいは連中も、香澄の恋人かと疑って写真を撮り、あとを追ったかもしれないのに。

ふりだしに戻った。ボスは部屋を出ていきそうにない。いや悪くすると、今晚はここに泊まっていくつもりかもしれない。一方私は、事件とはまったく関係なしに、はじめからこの部屋を出られない状況だ。

間男はまだ、道路を見下ろしていた。犯人の姿を探しているというよりは、何か別のことを考えているようだった。

メールが届いた。

『あのワゴン車さえいなくなれば、君は通報できるのか』

『できる』

もはや、そう答えざるを得なかった。仕方がない。とにかくこのマンションを抜け出せさえすれば、あとはなんとかなるだろう。

『絶対に、通報するか』

『約束する。追っ払う方法があるのか』

『カメラマンなんだろう？ 近くで何か事件が起これば、そっちの写真撮りに行きたくなるんじゃないか』

『そんな事件が、都合良く起きるもんか』

『本当に起こる必要はない。警察に嘘の通報をしてパトカーが来れば、サイレンの音につられて車を移動するはずだ』

なるほど。いい手かもしれない。なぜもつと早く思いつかなかったのだろう。

もっとも、ワゴン車がサイレンにつられなければ、話はさらにこじれる。いたずらで一〇番通報をした経験はないが、逆探知されて、犯人さがしが始まってしまうのではないか。

『心配するな。嘘の通報はおれがする。そのかわり、車がどいたら殺人の通報を頼むぞ』  
私はOKサインを男に送ってみせた。

間男は携帯でどこかへ電話をかけ、短かく通話してすぐに切ると、メールを送ってきた。  
『その角を曲がった先で、チンピラが血だらけで大げんかしている、と言ってやった。  
こっちはワゴンを見ているから、ボスが窓に近づいたら合図をおくってくれ』

私はもう一度OKサインを送った。

三分ほどたつと、遠くからバトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

すると、道路を見下ろしていた間男の視線が、ゆっくりと左の方へ移動していった。

成功したのか。車が動いたのか。私は祈るような気持ちで男を見つめる。

間男は手すりから身を乗り出し、ずいぶん遠くまでそれを見届けたあと、私に向かって  
親指をたててみせた。

よかった。

私は腰が抜けるほど安堵した。これでようやく、四日間にわたる軟禁状態から解放され  
る。香澄も仕事も、失わずにすむ。

メールが届いた。

『もう大丈夫だ。男ひとり、車から降りてむこうの角を曲がっていった。いまのうちにマ  
ンションを出ろ』

男がひとり？ 車から降りて？

『歩いて行ったのか？ 車は？』

『車はまだ停まっている』

私はがつくり首を折った。

『それじゃだめだ。もし相手が二人組だったら、車中にまだひとり残っているかもしれな  
い』

『いい加減にしろ。ふざけるな。人がここまでしてやったのに』

そんなことを言われても、状況は何も変わっていないのだから仕方がない。ここでうか  
つにマンションを出て行けば、これまでの苦労が無駄になる。

間男は怒りがおさまらないのか、頭をかきむしっていた。私は自分の臆病をなじられた  
気がした。間男に送る言い訳を考えているとちゅうで、しかし私ははっと息を飲んだ。

ボスがソファから立ち上がったのだ。

ボスは衣紋掛けからコートをとり、袖を通した。乱暴されたショックから立ち直った女  
は、いきりたって何かを喚いている。ボスはいきりたつたように、くると女に背をむけ  
た。そしてそのまま、振り切るように部屋の奥に消えていった。女もそのあとを追って  
いき、リビングには誰もいなくなった。

私はメールを送った。

『ボスが部屋から出ていった』

『本当に？』

私は間男に向かってうなずいてみせた。

間男は身を乗り出して下を見た。すぐにその視線が何かをとらえ、ゆっくりと右の方へ  
動いていった。まちがいない。マンションから出てきたボスが、そのまま立ち去って  
いたのだ。

こんどこそ、私は胸をなで下ろした。ボスさえいなくなれば、間男が通報を躊躇う理由はないわけだ。

『これで問題解決だな』私はメールを送った。『おれがここにいることは、警察にも言わないでくれよ』

しかしその返信は、思いもかけないものだった。

『だめだ。通報できない』

『どうして』

『出ていったのはきつと女の方だ』

『そんな馬鹿な。きつと、ってなんだ。見ていたんだらう？』

『傘をさしていたんだよ。こっちは真上から見ているんだから、中までは見通せない。でも、あれは女の傘だった。見覚えがある。だからボスはまだ部屋にいる』

傘？ 私の頭の片隅に、違和感のようなものが一瞬わき、すぐに消えた。

『たぶんボスが女から傘を借りたんだよ。今夜は雨は降らないという予報だったから、傘を持ってきていなかったんだ』

『女は部屋にいるか』

私は部屋を見た。誰の姿も見えなかった。

『リビングにはいないようだ』

『たしかか？』

『わからん。カーテンの陰は、ここからは見えないから』

『じゃあ、だめだ。冒険は出来ない』

間男は私と同じ台詞を吐いて、首を垂れた。

私も同じように、うなだれるしかなかった。

ボスは部屋にいるのか、いないのか。カメラマンは車の中にいるのか、いないのか。私たちはともに、見えない相手に縛られて身動きがとれずにいる。

まとわりつくような霧雨が、いつしか髪をぐっしよりと濡らしていた。間男の髪も、べつたりと頭に貼りついていてる。どこまで似ている二人なのだろう。

『おれたちは、瓜二つだな』

私ははじめて、どうでもいいメールを送った。

顔を上げた間男は、メールを読んだ。そしてそのまま、しばらく動かなくなった。どうでもいい短い文面を、何度も読み返しているらしかった。

やがて返信が届いた。

『これから警察に電話をする』

『今度は何を』

『事件を。殺人を目撃したと通報する』

私は目を睜った。

『急にどうしたんだ。早まるな』

『もう決めた』

『ボスに半殺しにされるんだらう』

『半殺しにされれば、すむことだ』

『やめておけ。殺された女には気の毒だが、おれたちにも自分を守る権利はある』

『おれと君とは違うよ』

『どこが』

『さっき君が言ったとおりだ。おれが助けを呼べば、女は殺されずにすんだかもしれないからな』

私は驚いた。そんなことを真に受けていたのか。

返信を送ろうとしたが、言うべき言葉が思い浮かばなかった。どうして彼を引き止めようとしているのか、その理由が自分でもわからない。

まごまごしているうちに、向こうからメールが来た。

『君は部屋に戻っておとなしくしている。いろいろすまなかったな』

間男はこちらにむかって手を振った。別れの挨拶だった。

私は無性に腹がたった。これまでのやりとりで一番、侮辱をされたように感じた。

人をさんざん巻き込んでおいて、いまさら自分が犠牲になると言いだす。取り残された私は自動的に、まるで勇気のないエゴイストの烙印を押されたような、みじめな気持ちにならざるを得ない。こんな馬鹿な話があるか。

いいだろう。はじめから、隣の女も、ボスも愛人も間男も、私には関わりのないことだ。お役御免というのなら、それで結構。あとは好きにするがいいさ。

私は間男に背を向けた。しかし「部屋に戻っている」といわれてしまった手前、オメオメその通りにするのも、指示に従わされているようで不愉快だ。結局はベランダに残って、正義のために自分を犠牲にする、崇高な男の姿を見守るしかなかった。

間男は携帯を操作している。しかし、どこか様子がおかしい。一一〇番へかけるにしては、やけに手間取っているようだ。

なにをぐずぐずしているのだろうと見てみると、間男が顔をあげた。

間男は私の顔を見た。それから携帯を指でさし、両手で大きな×の字を作った。

電池切れか……！。

私は神も仏も信じない。しかしここまで意地の悪い不運が連続すると、何かのバチがあったのではないかと本気で思えてくる。

いや、罰せられていると言うよりも、誰かに試されているような気分だった。

電車で老人が若者からまれていた時、寝たふりをきめこんだことがある。居酒屋で喧嘩がはじめまった時も、一番はなれた席に移って騒ぎに気がつかないふりをしていた。私はそういう人間だ。それでいいと思ったことは一度もないが、意気地のないのは生まれつきだから仕方がない。

間男は両手で手すりをつかみ、空を見上げていた。雨に濡れ、なす術を失った、惨めな姿だった。そこまで腹をくくったのなら、ボスがいようがいるまいが、部屋に入っている中で電話で通報すればいいのだが、そこまで気がつかないのか、あるいはいったん頓挫したことで、決意が萎えてしまったのか。

奇妙で、不格好な間が空いた。この間は、私に与えられた最後のチャンスだった。

私はおおきなため息を吐き、天に向かつてつぶやいた。

わかったよ。今度ばかりは、おれの根負けだ。

私は間男にメールを送った。

『おれが通報する。もう何も心配するな』

彼が受信できないのはわかっていたが、けじめとして、儀式として送信したかった。それから電話に画面を切り替え、一一〇番につなげた。

「もしもし、殺人事件です……」

携帯が、急に重たく感じられた。私は淡々と、マンションの住所と、香澄の部屋の番号を告げた。間男やボスたちのことには触れなかった。自分で隣室の物音を聞き、ベランダから部屋をのぞいて死体を見つけたと、そう言った。

電話を切ると、私はまた暗い空を見上げた。何年も会っていない弟の顔が、急にまぶたに浮かんだ。

弟は、私の母と再婚相手とのあいだに生まれた。義父は酒に酔うたびに弟を殴った。母はそのことを知らなかった。私も母に、そのことを言わなかった。告げ口などしたら、自分も義父に殴られると思ったからだ。

弟が殴られているあいだ、私は自分の部屋に逃げ込んで、頭から布団をかぶっていた。なんのことはない、いまの私と一緒だ。私が瓜二つなのは間男ではなく、あの時の私自身であった。

間男はなんのつもりか、私にむかってまた手を振っていた。その姿をぼんやり眺めていると、部屋の奥から現れた愛人が、放心したようにソファにすわるのが見えた。

なんとということだ。愛人はやはり、中にいたのだ。顔がきれいになっていくから、洗面所かどこかで鼻血をふいていたらしい。

傘をさして出ていったのはボスの方だった。間男はいつでも部屋に戻れたし、通報もできた。私が柄にもなく勇敢ぶる必要はなかったわけだ。もう私は、苦笑いしか浮かばなかった。

私は間男に、部屋に戻れと合図した。小指をたて、女が中にいるぞと教えてやった。

しかし、間男は手を振り続けている。何かを訴えかけるような、必死の形相で。

あいつ何をしているんだ……。私はぼんやり男を見やりながら、ぬれる顔を手でぬぐった。雨はまだ降り続けている。

次の瞬間、先ほど感じた違和感の意味が突然、頭にひらめいた。

ひよっとして……

ひよっとして、女を殺した犯人は……

大変だ。もはやワゴン車など気にしている場合ではない。私は間男にむかって叫ぼうとした。ところが彼はあいかわらず、私にむかって手を振っている。

それが「逃げろ」のサインだと気がついた時は、もう遅かった。隣の部屋から手すりの外側を跨ぎ、黒ずくめの男が突然、目の前に飛び降りてきた。

血走った目に怒りと殺意を煮えたぎらせた、ボスであった。

私を感じた違和感の正体は、傘そのものだった。

マンションから出て行ったのがボスと愛人のどちらだったにせよ、なぜ傘をさしていたのか。もし二人がずっと室内にいたのなら、雨が降っていることを知る機会はなかったは

ずだ。あの晩は降らないという予報だったし、降り始めたのは二人が口論をしている最中だったのだから。

音をたてない霧雨は、自分の目で直接見なければ、そうとわからない。ボスは一度も窓の外を見なかった。それでもその姿は絶えず私の視界の中にあっただが、愛人の方は、よく思い出してみれば一度私の視界から消えている。だとすればその間、愛人はじつは屋外にいたと考えざるをえない。そうでなければ、雨のことを知りえるはずがないからだ。そして彼女が見えなくなっていた時間は、ちょうど黒装束の人物が遺留品を回収に来ていたタイミングと重なるのである。

後日、警察が教えてくれたところによれば、殺人の動機は口封じだったそうだ。

隣の女は馬淵佐枝子という元ホステスで、詐欺や恐喝で複数回の逮捕歴を持つ女だった。ボスはこの佐枝子から、愛人との関係をネタに金をゆすられていた。彼は元暴力団組長の娘婿という立場であり、愛人の存在をばらされるわけにはいかなかった。そこで愛人と謀り、佐枝子の殺害を決意した。

ボスはまず、佐枝子にゆすられていることを逆手にとつて、マンションの一室を彼女に買い与えた。その際、すっかり合鍵を作っておく。そして向かいのマンションの同じ階にも部屋を借り、愛人を住まわせる。

次に、愛人に命じて運転手を誘惑させ、関係をもたせる。そして時をばかり、情事の現場に踏み込む。運転手は、這々の体でベランダに逃れ、今にもボスに見つかりはしないかと震え上がる。その隙に、ボスはすばやく向かいのマンションへ移動し、自殺に見せかけて佐枝子を殺す。その光景を、運転手に目撃させるという寸法だ。犯行直前に部屋の照明を点滅させたのは、運転手の注意をひくためであった。

もちろん、運転手は警察に通報できないだろうというのが、ボスの目論見であった。佐枝子は自殺として処理される。仮に運転手が良心に負けて通報するとしても、その場合、彼の目撃談そのものがボスのアリバイを証明することになる。いわば二重のからくりであった。

ボスは早い段階で、私に気づいていた。運転手のメールを傍受していたからだ。ボスは愛人に指示し、運転手の携帯にこっそりメール転送の設定をさせていた。彼は自分で誘惑しろと命令しておきながら、二人の関係に嫉妬していたのだ。

つまり、私が運転手に送ったメールは、すべてボスの携帯にも転送されていたのである。私の送ったメールはほとんどが、運転手からのメールの返信だった。したがって自動引用の部分を読めば、運転手の送信メールの内容もわかる。私たちのやりとりは、すべて筒抜けだったわけだ。

このメールによって、ボスは自分が殺人現場に落とし物をしてきたことを知った。物は、黒革のキーケースだったそうだ。

さぞかし慌てたことだろう。本来ならボスが自分で回収に行くべきだったが、その時点で彼らは、すでに私という観察者の存在を知っている。ボスが部屋から姿を消せば、私はそのことを運転手に知らせる。安心した運転手は、その場で警察に通報してしまうかもしれない。それでは回収が間にあわない。

ボスは代わりに愛人を行かせた。自分は窓辺にたちふさがって、愛人と喧嘩をしているかのように芝居を続ける。私のかけた電話にボスが出なかつたのは、窓の前から退くと愛

人の留守が丸見えになってしまふからであった。

愛人は佐枝子の部屋に侵入する。明かりを消したのは、先の殺人者との体格差を運転手に悟られないためだ。それからテーブルの上の品物を拾って、立ち去った。階段で黒装束を解いたのは、ワゴン車にひそむカメラマンの存在を意識したためであった。

ところが、彼女が拾っていったのは、ボスのキーケースではなかった。

キーケースは、植木鉢のそばに落ちていた。それを彼らは、テーブルの上だと誤解した。私たちのメールを読んでいたためだ。まず運転手がそう誤解して、私にメールをよこした。そのあとすぐに誤解に気づいて訂正メールを送ったが、私は最初のメールに返信をしたため、「植木鉢の下」という文言は、彼らの目に触れなかったのだ。

部屋に戻った愛人は、まちがった回収物をボスに差し出した。それは佐枝子の赤い小銭入れであったが、愛人は自分で部屋を暗くしてしまつたため、色の違いにすら気づくことができなかった。

ボスは激怒して彼女を殴りつけ、今度は自ら回収に赴いた。マンションを出ていったん違う方向に歩いたのは、むしろ私たちの目をごまかすためだ。この時はまだ、彼は私たちをごかますつもりでいた。しかしその間、私と運転手はそれぞれ自分が通報する覚悟を決め、互いにその意思を伝え合っている。ボスは佐枝子の部屋でこのやりとりを読み、もう逃げられないと思った。近所には偽通報におびきよせられた警官がいる。無線で連絡を受ければ、駆けつけてくるまでに一分とはかからない。

もともと気の短かったボスは完全に逆上し、怒りにまかせて私を殺しにかかった。せまいベランダで逃げることもできなかった私は、丸太のようにボスの腕に首を締め上げられ、手すりの外に放り出された。

ボスは、駆けつけた警官に現行犯逮捕された。愛人も翌朝、自ら出頭した。

地上七階から真つ逆さまに墜落した私は、全身の骨という骨を折り、右の視力と、左の肺を失った他、一生杖をつけて歩く体となったが、奇跡的に命はながらえた。

事件は大きく報道され、私は一躍、時の人となった。ちなみに、ワゴン車の中に二人目のカメラマンは存在しなかったそうだ。もうそんなことはどっちだっていいが。

間男は、私とやりとりしたメールの全文をマスコミに公開した。私が葛藤のすえに自ら通報を決断するまでの経緯は、意外にも世間からは好意的に受け取られた。おかげで香澄との関係発覚も、それほどスキヤングルにはならずすんだ。

それでも、香澄は私のもとを去って行った。理由はわからない。おそらく事件とは関係なく、ただ私がふられただけなのだろう。

繁子は私を許さなかった。私は劇団をたたき出された。もとより、こんな体になつては役者を続けていくこと自体難しい。やむをえず、私はこの世界から足を洗った。

最初の不安通り、みごとに恋人と仕事を失つたわけだ。

やはりあの時、ベランダで手を振る男など無視するべきだったか。もういちど同じ事態に遭遇したら、私はどうするのだろうと考えることがある。あるいは、あの夜の間男の立場だったら？

答えはわからない。しかし、少なくともあの晩よりはましな行動をとれるのではないか、

とも思う。

勇気と善意が報いられると思ったら大間違いだ、ということもわかったから、そんなことを期待するわけではない。ただ、一回やって出来たことなら、二度目も出来るだろうと思うだけだ。この年にして、ようやく最初の一回が出来た。私にとって重要なのは、そこだった。

あれ以降、間男とは何の音信もない。